

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：12101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00542

研究課題名（和文）日本語複合述語の総合的研究

研究課題名（英文）Integrated studies on compound predicates in Japanese

研究代表者

西山 國雄（Nishiyama, Kunio）

茨城大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：70302320

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では日本語における、述語を含む複合語の構造と派生について、名詞、形容詞、動詞の3つの統語範疇にまたがった総合的研究を行った。動詞由来の複合名詞は、左要素が目的語か付加詞かで統語構造が異なり、前者は右要素が最初に動詞化している。複合形容詞については、日本語の「欲深い」と英語のoil-richの意味的平行性に着目し、統語的に平行に分析をした。「ない」を含む複雑形容詞については、文法化と語彙化の区別を精密して、言語変化の段階の違いと様々な統語的振る舞いの差を捉えた。丁寧形の分析についても、品詞により形態素やその順序が異なるので、動詞と形容詞の構造の違いの理解に寄与した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで述語を含む複合語の研究は語彙的な分析が中心だったが、統語的分析を推進することにより、複合語と統語原理の関係に新たな光を当てられた。述語が統語構造の中でどのような位置を占め、項をどう認可するかという統語理論と、語根がどのように範疇化されるかという形態理論を用いて、語彙範疇の共時的出現に加えて、通時的にも範疇がいかに出現して（「ない」を含む複雑形容詞の場合）、そして消滅するか（複合動詞と動詞連続構文の）について、広い視点で捉えることができた。

研究成果の概要（英文）：This study conducted integrated cross-categorial (nouns, adjectives, and verbs) research on the structure and derivation of compounds containing a predicate in Japanese. Regarding deverbal nominal compounds, their structures differ depending on whether the left-hand element is an object or an adjunct, and with the former, the right-hand element is verbalized at first. Regarding adjectival compounds, the study focused on the parallelism between Japanese yoku-bukai 'greed-deep' and English oil-rich, and analyzed them in a parallel fashion syntactically. For adjectival compounds containing nai 'not', the study made fine-grained distinction between grammaticalization and lexicalization, and captured various stages of their historical changes and syntactic behaviors. With analyses of polite forms as well, due to the morphemeic and linear order difference depending on the category, it contributed to the understanding of the differences between verbs and adjectives.

研究分野：言語学

キーワード：複合語 述語 目的語 付加詞 形態論 統語論 動詞連続構文 丁寧形

1. 研究開始当初の背景

動詞や形容詞のような述語は文の中核を成し、述語の意味がどう投射され、主語や目的語などの項をどう認可するかは、統語理論の中心的課題である。これまで述語を含む複合語の研究は語彙的な分析が中心だったが、統語的分析を推進する意義は大きい。

2. 研究の目的

日本語における、述語を含む複合語の構造と派生を解明することにより、日本語の複合語の理解に貢献するとともに、一般形態理論と統語理論の発展に寄与することを目的とする。

3. 研究の方法

「立ち読み」や「本読み」などで例示される複合名詞、「欲深い」や「経験豊富な」などで例示される複合形容詞、そして「押し倒す」で例示される複合動詞を統語的に分析して、相互に得られた知見を応用して、分析の深化を図る。

4. 研究成果

(1)複合名詞、(2)複合形容詞、(3)複合動詞、(4)それ以外の成果に分けて述べる。成果は全て刊行済みか刊行予定であり、その要旨を述べる。

(1)

動詞由来の複合名詞は、左要素が目的語か付加詞かで統語構造が異なり、前者は右要素が最初に動詞化している。これにより目的語複合語が連濁を起こさず、一方で付加詞複合語が連濁を起こし、アクセントがないことが説明される。また目的語複合語が軽動詞「する」を伴わないのは、語根の姉妹に在る動詞化主要部が、ゼロになるという語彙挿入規則を想定することで捉えられる。意味解釈については、付加詞複合語に見られる事象・状態の多義性が、「焦げた肉」のような「た」のついた動詞による修飾にも見られることに着目し、イベント構造を含む統語構造を用いて、左要素が道具と様態の時に事象の解釈が得られることを捉える。

(2)

複合形容詞については、日本語の「欲深い」と英語の oil-rich を平行的に扱った分析はこれまでにないが、意味的平行性がある。「太郎は欲深い」とは、太郎の欲が深いことで、太郎そのものが深いわけではない。また The country is oil-rich は、その国の石油が豊かということで、国そのものが豊かなわけではない。このことから統語派生を[太郎 R 欲][深い]、[the country R oil][rich]から編入により複合形容詞ができたと分析できる。また関連して、「手に負えない」や「頼りない」のような「ない」を含む複雑形容詞の分析も行った。ここでは文法化と語彙化の区別を精密に行い、言語変化の段階の違いが、様々な統語的振る舞いの差に対応することを示した。これにより、品詞の出現に関する理解が深まった。

(3)

研究代表者はかつて複合動詞と動詞連続構文の共通性を、動詞+動詞の観点から捉える研究を発表したが、その後の研究の進展で、少なくとも一方は助動詞が絡んでいる可能性が高まった。

例えば「降り出す」などでは「出す」が本来の意味を失い、始動のAspectを指している。動詞連続構文でも助動詞分析が発表されて、両者の共通性を助動詞化という新たな視点で見ることが可能になった。「押し倒す」のように動詞+動詞のように見える複合語であっても、「太郎の背中を押す/*押し倒す」の対比からわかるように、「押す」は項を認可しておらず、助動詞化している可能性がある。同様に cook eat に相当する動詞連続構文も、cook は助動詞だという分析があり、共通性が浮かび上がる。先の「ない」を含む複雑形容詞の場合は、新しい語彙範疇（形容詞）の出現の例だったが、複合動詞と動詞連続構文は語彙範疇（動詞）の消失という現象ということになり、語彙範疇の栄枯盛衰についての理解が深まった。

(4)

「食べました」や「高いです」のような丁寧形の分析についても、品詞により形態素やその順序が異なるので、動詞と形容詞の構造の違いの本質に迫ることができる。「*食べるです」が言えないことから、「です」は動詞とは共起できないことがわかる。しかし「食べるでしょう」は可能なので、「です」と「でしょう」はいかなる関係にあるか、という問題が生じる。分析の基本としては、動詞の環境では「ます」が出ると考えるので、「でしょう」という、丁寧かつ推測の環境では、たとえ動詞があっても「ます」が出ないことを保証する必要がある。これは丁寧と推測の素性を融合させることで可能となる。融合されると、単独の素性より指定部分が増え、単に丁寧を「ます」に置き換える規則より優先して適用される。従って丁寧と推測が融合した環境では「ます」ではなく、「でしょう」が出ることになる。このように丁寧形の分析を通じて品詞と形態構造の関係が明らかになる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 西山國雄	4. 巻 -
2. 論文標題 日本語の形態論と他部門のインターフェイス	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 形態論と言語学諸分野とのインターフェイス	6. 最初と最後の頁 143-179
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西山國雄	4. 巻 -
2. 論文標題 「ない」イディオムと語彙化単著	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 レキシコン研究の現代的課題	6. 最初と最後の頁 51-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西山國雄	4. 巻 -
2. 論文標題 日英語の複合形容詞 oil-rich と「欲深い」の平行性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語におけるインターフェイス	6. 最初と最後の頁 250-275
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西山國雄	4. 巻 -
2. 論文標題 東インドネシア言語の繰り上げ述語の複文構造	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論2	6. 最初と最後の頁 323-332
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西山國雄	4. 巻 -
2. 論文標題 動詞由来複合語	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 生成形態論の新展開	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西山國雄	4. 巻 -
2. 論文標題 日本語の丁寧形	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 構文形式と語彙情報	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 西山國雄
2. 発表標題 形態理論の等価性
3. 学会等名 レキシコン研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 西山國雄
2. 発表標題 日本語丁寧形の異形態、通時、形態素順序、自由変異
3. 学会等名 ワークショップ：形容詞が関わる語形成を巡って (招待講演)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 西山國雄	4. 発行年 2021年
2. 出版社 教養検定会議	5. 総ページ数 204
3. 書名 じっとしていない語彙	

1. 著者名 西山國雄・長野明子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 240
3. 書名 形態論とレキシコン	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------